



ふじ美が原

富士見中学校
平成23年9月29日

第2回 白鈴祭 「一喜一結」 ~深めよう絆 広めよう輪~ その2 一歩深まった”絆”、一歩広がった”輪”

【ステージ発表】

【国語 短歌発表】

夏の夜

明るく輝いて
天まで届け思い出の舟で
一年四部 前島彩乃さん
一年一部 森山 泰嗣君

部屋

すこねむす、むし暑い
話も熱い満月の夜
一年一部 金子 真論さん

温暖化

防ぐために どんぐりを
みんなで植えた 小さな一本
一年三部 小林 七味さん

乳しぼり

はじめてしぼった牛乳は
ほんのりあまい命のよみ
二年四部 櫻本 李枝さん

硫黄岳

下界見下ろし 雲流る
巨大な蛇が 去りゆく様に
二年三部 田中 美緒さん

雲の海

雲海上を舞う 朝の虹に
風に運われた 雲たちの舞
二年一部 細川 香奈さん

朝はやく

起きて見たのは 赤い雲
空に輝き つかまえては
一年一部 三木 将矢君

硫黄岳

登った後れ 吹きとんだ
自然の嵐 爆裂火口

【広島平和体験研修】

あなたにとって平和とは何ですか？わたしにとって平和とは、みんなで笑いあうこと、みんなが笑顔で幸せにいられること、大切な人と一緒にいられること、仲間がいて、家族がいること、今の生活が続けられること。

1945年8月6日午前8時15分 広島に世界で始めて原爆が落とされました。たった一発の原爆は、広島を瞬時に焼き尽くしました。この夏、私たちは、学校の代表として広島に行かせてもらいました。今日はわたしたちが学んだことを報告します。

それは良く晴れた日でした。原子爆弾「リトルボーイ」をのせたB29が広島市上空に迫りました。午前8時15分、T字型の相生橋を標的に原爆が投下されました。上空600mで爆発しました。爆心地周辺の温度は3000度以上に達し、穏やかな町だった広島を地獄に変えました。

わたしたちは、「証言者の集い」に参加して実際に原爆にあった「被爆者」の方の話を聞いてきました。その言葉の一つ一つは、どんな資料より重く私たちの心に響きました。

証言者、田中勝さんのお話です。田中さんは、あの日、中学生でした。道路を広げる作業をするための準備をしていた瞬間でした。フラッシュのような光線が光り、田中さんの体は爆風で7mほど吹き飛ばされ意識を失いました。目を覚ますとあたりは真っ暗でした。田中さんの体は、左半分がひどいやけどをおい、飛んできたガラス片で腕の肉がはぎとられ、親指が入るほどの穴が開いていました。火の手が上がる中必死で病院に向かいました。途中、田中さんは、「助けて！」と叫ぶ人や目が飛び出た子供など地獄のような光景を見ました。田中さんは体半分のやけどは治るまでに30年以上かかり、頭をうった衝撃で目が片方見えなくなりました。そのため、田中さんは自分の夢であった彫刻師をあきらめるしかありませんでした。田中さんは自分の体験を通して「原爆の恐ろしさは、うけたものしかわからない。原爆は2度と落としてはいけないということをお伝えしたい」とおっしゃっていました。

夢現 歴史の園へのお参り
書の内容が、一歩深まる
三年一部 樋口 ひめ花さん
三年一部 小池 祐一君
龍安寺 桜舞い散る 石庭で
見つらなる 十五箇目の石
三年三部 植栗 彩加さん
金色の 風風吹く 水面を
「水のせせは、ははたいてく
三年四部 伏見 颯君
御殿荘 見なれぬの「くぐり
友との夜も 今日かぎりかな



平和体験学習報告

2年 久保 啓悟 小林美咲
土屋 優結 吉田 崇人
窪田ふれあ

私は、今回の研修を通して原爆の恐ろしさがわかりました。私は、原爆についてテレビなどで言葉を耳にしたことがあり、恐ろしいものだというのほうすず知ってはいましたが、今回の研修に参加し、証言者の方のお話や資料館を見学し、広島への想いが180度変わりました。体や心に未だに深い傷を負っている人たちがいるというのが一番印象深く、そして、原爆の恐ろしさが肌で感じられました。(小林 美咲紀さん)



直接体験した人の話を聞き、原爆の恐ろしさを感じました。原爆は、一瞬にして人の命を奪ってしまい、さらに生き残った人さえ、生き地獄としてしまうのです。そんな核兵器は、この地上からすべてなくしたいと思いました。争いを起こすのは人間です。しかし、争いを止めることができるのも人間です。私たちは、広島に原爆投下を原点に戦争のない、平和な日本を築いてきました。世界中の人が二度とこのような悲惨な想いをすることがないように、広島の実情を語り継いでいかなければならないと思います。(土屋 優結さん)

広島研修で学んだことは、熱線と放射線の恐ろしさです。平和資料館でみたやけどを負った女性の写真や遺品は、熱線の恐ろしさを知ることができました。今でも放射線に苦しんでいる人がたくさんいることも知ることができました。いろいろな貴重な体験をして感じたことは、二度と起こしてはいけないし、一人一人が平和について考えれば、原爆や核兵器はなくなると思います。(窪田 ふれあさん)

当時中学2年生だった定信多紀子さんのお話です。定信さんが通っていた女学校では戦争が激しくなると授業中でも毎日空襲警報がなり、B29が空を飛んでいました。そのときの中学生は、建物疎開などさまざまな作業を手伝い、夏休みなどなかったそうです。あの日、定信さんたち2年生は作業のある日で原爆が落とされた近くへ行く予定でした。しかし、定信さんはなぜか気が進まず、1度、家に帰りました。そして、友人の家に行こうとした時、原爆が落とされました。オレンジ色の光が輝き、被爆地からは少し離れていた定信さんの家も爆風で天井が吹き飛びました。定信さんと家族は急いで防空壕へ逃げ込みました。一度荷物を家にとりに行った途中で黒い雨が定信さんに降り注いだそうです。広島から「うおー」というまるで動物の鳴き声のような人の叫び声が聞こえてきました。そして、町が炎に包まれていきました。終戦になり、9月から学校がはじまりました。最初にしたのは、作業中に犠牲になった友達の骨を拾うことでした。集めた骨でいくつも山ができました。定信さんは「広島は原爆が落ちた町ではありません。落とされた町なんです」とその悔しさと怒りを話してくださいました。

僕が今回の研修で一番印象に残ったことは、原爆ドームと被爆者の方のお話でした。まず、原爆ドームのことです。僕は、原爆ドームを見た時、原爆が落とされた時の状況が頭の中に浮かんできました。たった一つの爆弾で何もかも吹き飛ばされ、焼け野原になってしまった広島市を想像してとても残酷だと思いました。被爆者の方も当時の状況を強く語ってくれました。僕は、話を聞く前の広島は、「原爆が『落ちた』」というイメージでした。しかし、被爆者の方は「広島は、原爆が『落とされた』」と語っていました。それを聞いて、広島のイメージが変わりました。僕は、この研修で原爆戦争の恐ろしさを学ぶことができました。(吉田 崇人君)

一番に戦争、原爆の恐ろしさを学び、当時の広島の悲惨さを感じました。平和資料館の原爆が落とされる前と後の写真は、原爆の被害の大きさを物語っていました。見ただけで辛かったです。あと、被爆者の方のお話では、今の自分の生活からは考えられないものばかりで、本当に怖く、恐ろしいものだと感じ、原爆はあってはならないものだと思えることができました。原爆ドームや本川小学校など、当時の姿のままに残っているものは現地に行ったからこそ見ることができ、写真やテレビで見るのとは違う雰囲気を感じることができました。特にこういう研修に行ったからこそ学べたと思います。(久保 啓悟君)

わたしたちが平和を守るためにできることは何でしょうか？原爆ドームは原爆の恐ろしさを人々に伝えるための「負の遺産」として世界遺産となりました。戦争の恐ろしさを知ることを感じ、戦争をしてもさせてもいけないと一人一人が強く思わなくてはいけない。そして、感じた平和への願いを次の世代へと受け継いでいくこと、また、日本だけでなく、他の民族や外国の習慣など、世界について学んで互いに分かり合えるようになることが大切だと思います。

今年80歳になる定信さんや田中さんから「平和への願い」を私たちは受け取ってきました。「2度と戦争を起こしてはいけない。核兵器をなくす」ためにできることをしていきたいです。

8月6日、平和記念式典に参加し、8:15、平和の鐘を聞きました。66年前原爆が落とされた空にその日平和の願いを乗せた鳩が飛び立ちました。ずっとこの平和な空を続けていきたい。わたしたちも願いを込め、みんなで作った千羽鶴をかざりました。そして夜、平和へのメッセージを書いた灯籠を流しました。広島に集った多くの人の平和への思いで川はいっぱいになりました。最後に平和記念式典での「平和への誓い」を紹介します。

みなさんもこの発表を聞いて、ぜひ家族や友達と原爆や戦争について話をしてください。そして、今日わたしが伝えたことを多くの方々に伝えてほしいと思います。平和は与えられるものでなく、自分たちで守り、築くものだと思います。

これで広島研修の報告を終わります。ありがとうございました。



富士見町立富士見中学校
諏訪郡富士見町富士見4654番地
TEL 0266-62-2009
FAX 0266-62-7409
伊藤十三雄